

Title	21世紀日本に要求される学問論
Sub Title	
Author	佐々木, 力(Sasaki, Chikara)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.特別号『将来編』 (2003.) ,p.2- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	創設50周年記念特別紀要 第1部 基調報告1
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-000S2003-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

院になればなるほど留学生が多い。半分以上が世界中から集まった人たちがやっている。先生もそうですし、院生も世界中から集まっている。半分ぐらいがアメリカ人ではないという大学院が幾つもあるわけです。こういう国際化の現実がある意味ではアメリカの大学院の持っている活性化あるいは創造性というものと関係があるのではないか。

それを日本がそのまま踏襲することが、すぐできるかどうかは別にいたしまして、知の国際化とか、グローバル化という問題は大学院について考えようとするとき非常に大きなテーマになると思います。また、社会学研究科のような大学院はアカデミックな大学院として、どのような形で知の創造とか伝承の中で、自分たちの位置付け、あるいは役割りを定義していったらいいのか、こういうことも大切なことであります。とりわけ、昨今、いろいろ計画されておりますプロフェッショナル・スクールというものと、アカデミックな大学院との関係についても考えてゆく必要があろうかと思えます。

このような様々な問題と論点の文脈の中で大学院と、そこにおける知のあり方について、その理念、環境、組織、そういった点について、きょうのお話と討議が展開されていけばと思っております。

前置きが長くなりましたけれども、きょうお招きいたしました3人の先生方をご紹介します。

まず、私の隣にご着席になられているのが第1番目の報告者でいらっしゃる、東京大学大学院教授、佐々木力先生でございます。

佐々木先生は、ご専門が数学史、あるいは科学史、科学哲学ということでございますけれども、学問論においても卓抜したご意見をいろんな形で世に問うておられる先生でございます。

第2番目に報告をお願いいたしますのは、寺崎昌男先生でございます。

寺崎先生は、皆さん、ご承知のように、東京大学の名誉教授であり、現在(2001年4月)は桜美林大学の大学院の国際学研究科の教授であられると同時に、桜美林大学教育研究所長もされており、教育学、特に教育制度論においては第一人者であり、またいろいろ実践の面でも新しいことを次々と実践しておられる方でございます。

3番目には、立教大学の教授で宮島喬先生でございます。

宮島先生は、ご承知のように社会学をご専門とされ、知識社会学も含めて、広く社会学について研究され、発表されておられます。我々の研究科にとりまして、長

い間いろいろな形で宮島先生には直接教育と研究の両面にわたりご指導をお願いしてまいりました。きょうは、社会学の一分野からのご提言、あるいはご意見の表明ということがあろうかと思えます。

簡単でございますけれども、3人の先生方のご紹介を終わらせていただきまして、早速、報告1ということで、佐々木先生よりお話を伺いたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

報告 1

21 世紀日本に要求される学問論

佐々木 力

(東京大学大学院総合文化研究科)

ただいまご紹介いただきました佐々木と申します。私が3人の中では一番弱小ということもございまして、前座という言い方がありますけれども、最初に演壇に立っております。3人は別に棲み分けなり役割分担ということをしているわけではないのですが、一応私が一般的な学問論、そのあとの寺崎先生がもともと教育学の専門家でありますので、制度的な側面、それから、ここは社会学の研究科ですので、日本の社会学のエキスパートということで、宮島先生に社会学プロパーの問題提起をしていただく。ということで、私は学問論一般の話をするという役割を担っているものと理解しております。

私は学問論とかそういうことが専門ではありませんで、狭い専門分野としては、ヨーロッパの近代的な知識という学問が成立しました17世紀の近世のフランスの、とくにデカルトが専門であります。デカルトという哲学者という狭い枠で捉えられてしまうことがあるのですが、彼は実は近代西欧数学を創造した思想家でもあります。どうしてデカルトが問題なのか。私のプリンストンの学位論文は『デカルトの数学思想』です(2003年2月、東京大学出版会から公刊)。「近代数学」というように、数学に時間的な区切りを設けるのが正しいかどうかということにも議論があると思うんですけども、その「近代数学」を創造した人の思想形成過程を辿り、その哲学的な側面なりを、17世紀のヨーロッパ社会のバックグラウンドを踏まえて考察する、そういったことが私の学位論文の内容でした。

東北大学の大学院で数学を博士課程修了(博士論文は提出しないままに終わりましたが)まで修め、ご丁寧に

も、今度はプリンストン大学大学院で、前述の学位論文によって博士号を取得しました。文理の学問を二つとも修めた「変な」型の学者です。

それから、私はもともと東北の農山村の、それほど裕福ではない家庭の生まれでありまして、そういう「変な」バックグラウンドを持つことが、自分で言うのも何ですが、私の面白さだと思っております。

私の、きょう話すことの中身は、1997年春に出版しました拙著『学問論——ポストモダニズムに抗して』（東京大学出版会）の延長上にあると考えていただいて結構です。2日前の4月12日は東大の開学記念日で、毎年入学式を挙行しますが、それに合わせた発行日が付いております、みずす書房刊の『二十世紀数学思想』、実はこれが私の専門に近い著作です。現代数学というと、一般の人には馴染みにくいでしょうが、実はそちらのほうが私の専門に近いことなのです。そういうことを専門にしております観点から、文字通り管見に基づいて、21世紀の初めの年にこうして話させていただく次第です。多少の創意もあろうかと思しますので、ご清聴いただきたいと考えます。

まず、近年の大学「改革」の問題点について、お話しいたしましょう。

手始めに、「学力」衰退の現代に大学院における学問の質をいかにして維持ないし再興するかという問題を考えて行きます。問題は日本にとどまらず、世界的だが、とくに日本で顕著であり、それには、戦後「教養」（ビルドゥング）理念が拡散してしまっている一方、専門（ファッハ）教育もまだ未確立で、その研究基盤は日本では未だ確立していない。総じて、戦後の学問理念に代わりうる理念が存在しないままである、と論じてゆくことにいたします。

私は、ただいま杉浦先生から東京大学大学院のスタッフとしてご紹介いただきましたけれども、それは大学院重点化という、ここ15年ぐらいの国立大学の制度変更の結果です。その旗振りをやったのは理論物理学者の有馬朗人先生でありまして、最近、文部大臣としても一般の方の目に触れる機会があった学者です。私も科学史・科学哲学という教養学部の研究室を代表して、その大学院重点化にかかわってまいりました。私は30代の前半で東京大学に赴任した直後から、人よりははるかに早く教室主任をやり、ごく近年までその職に就いていました。現在は、そういう職から一切退いて研究センターにやっておりますが、その改革過程と付き合っただけで、いろいろと学問論について考える機会をもつことが

できました。私は大学院総合文化研究科の部局で、科学史・科学哲学研究室に基本的な軸足を据えておりますが、もう一方で、昔のキャリアを引きずりまして大学院数理科学研究科でも教壇に立っております。昔は理学部の数学科というと本郷にあったのですが、現在では、ご承知の方もおられると思うのですが、数学を学ぶ学生は駒場に足場を据えております。その大学院コースが数理科学研究科というところで、総合文化研究科と並んで駒場あります。そこでも、いわゆるアソシエイト・スタッフとして数学史を学部4年生と大学院の学生に講じております。

皆さんも最近耳にする機会があるかと思うのですが、その数学の学生、日本では有数の優れた数学者がいるはずなのですが、彼らの成績が、試験答案を見る限り、どうもおもしろくないのです。数学だとか国語の基礎学力低下が世間で問題になっていますが、その問題に私自身も直面せざるを得なくなっているわけです。「改革」という旗を掲げて、ここ10年から15年ぐらいの間ずっと議論し、大学院重点化を推進してきたわけで、私たちは月給をもらえる先が大学院に変わっているわけですが、必ずしも実状はよくなっていないように思われる。数学史だとか科学史の学問をやろうとする大学院生は、ストレートにそういった科学史をやるために来るのではなしに、一度何かものを書いて、容易には飯が食えないところで来るものなので、それなりに選りすぐられた人材が集まっているのですが、工学部だとか、理学部だとか、そのほか実学的な側面をもっているところは、数学科に限らず、どうも一般に学力が停滞しているように見受けられます。

私の大学院での専門は歴史学で、米国のプリンストン大学から科学史という学問を中心に西洋史で学位を所得しています。それで、アメリカ人の学者とは密な交流があります。それから、研究のテーマがフランス近世史なので、最近では、フランスの学者たちと研究交流を熱心にやっています。精神的に一番アットホームさを感じるのはフランスの学者たちと一緒にいる時で、実際に数年前までは、アラビア数学史という、ここ四半世紀の間に最も数学史の分野で進捗の著しい分野のエキスパートであるロシュディー・ラーシェド教授が東京大学の科学史の同僚にいました。彼はカイロ生まれで、最近までフランスのCNRS（国立学術研究センター）のトップの一人の学者でした。

ラーシェド教授に言わせると、フランスだとか全世界でも学力停滞という現象はあるらしい。彼が言うには、

「それは、君が憂慮している日本の特殊現象ではない。フランスなどでも同じような現象が見られる」。しかし、私から言わせると、日本独自の、世界的に見ても、とくに著しい側面があると考えざるを得ません。それで、どういった側面が危機的な状況にあると私の目に映るかといいますと、前述の学力危機が戦後の民主主義的価値観の衰退と結びついているように見える。私が尊敬している日本の近代思想家というと、明治の福澤諭吉、それから、私と郷里が同じなのですが、大正の吉野作造、最後に昭和では丸山眞男が挙げられますが、彼らの築いた思想的遺産が総体として危機的な状況にある、と私の目には映る。吉野は宮城県の前古川出身で、吉野作造記念館が古川市にできており、私もその立ち上げに協力したことがあります。丸山眞男先生とは最晩年に交流する機会がありました。直接ではなく、書面を通じてでしかありませんでしたが。そういった、いわゆる開明思想を担った「進歩派」が今、危機的な状況にいる。とくに現在は、戦後の民主主義を担った「進歩派」の危機というふうに捉えることができるのではないかと思います。「進歩」という言葉の近年の命運を考えてみれば、そのことは如実に実感できるはずですよ。よろしいでしょうか、科学技術のみならず、社会の「進歩」それ自体を極めて矮小化した形で葬り去ろうとする思想が最近の支配的な言説の基調ではないかと私は言いたいのです。

その戦後の民主主義期に立ち上がったのが「教養部」という制度でありました。東京大学の場合には「教養部」ではなしに、教養学部という後期専門課程をもつ特殊な学部として、矢内原忠雄総長の下で立ち上げられたのですけれども、そこで謳い上げられた教養概念が、制度的には教養部の解体という形で後退を迫られた。先程、学力の低下という現象を現代的な特徴として挙げましたけれども、それが制度的にも前述のような形をとっている現れている。そのことが最近の大学ないし大学院「改革」の裏面で進行しているのではないかと、私は思います。

それでは、その教養の退潮というふうに言われることについてですけれども、これを必ずしも私は悲観的に捉えているわけではありません、ともかく画一的な教養理念は退潮したということが言えるのではないかと思います。19世紀初頭のドイツでこういった教養概念を独自に捉え直したのが、ご承知のとおりヴィルヘルム・フォン・フンボルトという卓越した言語学者（フィロログ）でした。それが、アメリカ型リベラル・エデュケーションを経過し、戦後日本の教養概念になった。現在は、画一主義的教養概念からは決別するにしても、多

元的な価値観を容認し、大いに議論し合える風土の中で、新たな教養理念を模索すべき時期かと思えます。新たな再建を迫られているのが戦後の教養概念なのです。

私はよく学生たちに、現在のような思想の後退の時代、反動期には、時流便乗の物書きによるくだらない商業主義的受けを狙った書物よりも、古典をひもとけ、と言っています。

また他方で、大学なり大学院の専門教育・研究の現場では、創造的な言説を生み出すための専門教育が要請されております。これは堅実な教養教育があって、初めて実現できることだと信じます。その本格的な専門教育は、近代日本では、明治10年（1877年）に創設された東京大学が帝国大学として再編される明治19年（1886年）に始まったとあってよい。この時に、ドイツ近代大学の理念に合わせて専門学問研究を充実するということが、確かに大学院の制度化が図られ始めたわけですが、私も、私がアメリカのグラデュエイト・スクールの専門的な教育研究の現場に実際に参加した経験から言うと、日本の専門教育は未確立であると結論せざるを得ないと思います。

アメリカの場合には、社会の根底にプロフェッショナルリズムが存在し、専門学問分野での熾烈な競争に基づく振るい落としがごく普通に行なわれています。もちろん、これはハーヴァードやプリンストンのようなエリート大学だけで通用する考えなのかもしれません。日本ではともかくこの専門研究ということが、明治時代から議論の対象になっていました。とくに参照していただきたいのは、森鷗外が自分のドイツ留学体験を踏まえて発表した「妄想」という短編創作です。岩波文庫にも入っておりますし、当然、鷗外の全集に入っております。そこで鷗外が嘆いていることは、自分はともかくドイツで熾烈な訓練を通じた学問教育を受けたいけれども、果たして日本に土着した学問エートスになりえるだろうか、ということです。そうして鷗外は自問しています。自分のライヴ的存在であった畏敬する日本人研究者も存在する。この人物は間違いなく北里柴三郎のことで、慶應義塾大学の医学部との因縁も浅からぬ人でありますけれども、彼のような人は確かに存在するとしても、自分はある種の嘆きの声を発さざるを得ない、と鷗外は言う。その嘆きは、鷗外の文学者としての自己表現にもなっているわけです。

19世紀のドイツの厳格な学問研究エートスは、その世紀末にはアメリカに定着し始めます。私はアメリカのプロフェッショナルリズムをそのまま見習うべき模範とは

考えません。けれども、鷗外の問いは、今なお問われるべき学問的問いとして厳然として存在し続けていると思います。

こういった中で、私たちは、先ほど言及しましたように、教養理念の拡散をも経験しています。これは画一化が崩壊したので仕方のないことだ、と諦めてしまうべきなのかもしれませんが、私は必ずしもそうは思いません。少なくとも、ここでの専門分野、社会学研究科の学問分野では、やはりある種のアイディールを改めて持たなければならないだろう。それを確立しなければ、その下で学ぶ大学院生なり教員が一つの目標のもとに、これから未来を展望するということができなくなるのではないかと危惧します。

社会学は、実に魅力的な学問です。私も数学史の学徒ながら、マックス・ウェーバーとかエーミール・デュルケムのような尊敬すべき先学の著書を、大体網羅的に読んだりもしておりますけども、科学史への社会史的アプローチにとっては必須の学問的準備かと思えます。マンハイムやシェーラーらの知識社会学だと、直接、科学社会学と結びつきます。私たちの科学史という学問分野は、多様な要求があるがゆえに、学者の個性が露骨に出る学問であります。社会学はそれほど重要であり、ある意味で学問の王者である、と誇りとすべきでありながら、他方、どんなこととも関係するがゆえに、悪い言葉で言えば、ごみ捨場のような、矛盾の集積点になってしまいかねない危険性をも抱えている。しかし、そのように重要な考察の対象を、19世紀の後半にマックス・ウェーバーや、デュルケム、あるいはテニエスのような草創期の社会学者たちは、社会学会を立ち上げて一つの学問として育て上げようとした。そういう原点に戻って、再度学問の理念、その技法について考えてみるべき時期に差しかかっているのではないのでしょうか。

さて、次には大学院における学問に要請される3つの規準について、具体的に話させていただきます。

私たちが大学院の専門研究に携わったり、あるいはその現場で学ぶ大学院生として満たすべき学問的要件について、私は以前に小論を展開したことがあります。私は、試みに3つの規準にまとめてみました。

まず第1の学問的規準とは、健全性(healthiness)、社会に害を与えないことです。この規準は簡単なように見えますけども、最近のような高度科学技術社会においては、極めて重要な、ごく基本的な学問規準ではないかと思えます。高度な技術は、大きなリスクを伴いがちです。現在、社会学でもリスク社会という概念が広まっている

のではないかと思います。このリスクを軽減し、極小に押しとどめるような社会のシステムを考えることは、現代のように無条件でさまざまなテクノロジーを制度化していいかどうかが問題になっている時代には、極めて重要なクライテリオンになるのではないかと思います。

第2に、堅実性(solidity)の規準が挙げられます。マスコミによく登場する、いわゆる「学者」、実状は評論家だと思うのですが、彼らと違って、やはり私たち学問人は、この規準を肝に銘じて若い時からわが物としておかなければならない。私は最近の日本のテレビを中心とするマスコミの言説には、国際的水準では殊にとても我慢しきれない低俗さを感じます。そのような安易さに流されることなく、やはり孤高を守りながらも高い批判性を維持し続けること、このことが極めて重要ではないかと思えます。

第3に、堅実性とも関係しますけども、やはり大学院での学問というからには、先駆性(pioneering)が要請されます。時代におもねった評論家的学問ではないことです。この規準に関しましては、先ほど、鈴木孝夫先生が話されましたけども、明治時代、大正時代のように日本に明確な先駆的な文明、欧米社会が存在し得た場合には確かにそれに追いつくことが先決でしたでしょうが、これからは国際的な先駆性を自ら切り開かなければならない時代がやってくる。評論家的で一過性の、確かに10年ぐらいのタイムスパンではもてはやされることがあっても、今後の学問史に残り得るような堅実性を備えたフロンティアに立った学問を創造することが極めて重要になるのではないかと思います。

この3つの要件を満たすというのは、ごく単純なように見えながら、私の同僚、とくに世間的に言説を広く発信している同僚を見ますと、この規準を満たし得ている人はごくわずかではないかという危惧の念をもちます。自分のことも振り返ってみた場合でも、身につまされ、反省させられる次第です。

ともかく大学院というからには、同時代の社会の常識に敢えて逆らう必要があるかもしれない。先ほど、「世論」という言葉は世に受け入れられている考えで、「輿論」とは違う概念だという紹介がありましたけれども、まさしく、そういった常識に敢えて立ち向かうことが学問には要求されるかもしれない。もちろん、別に痩せ我慢をしてということではありませんが、現実に安易に妥協せず、進むべき理念を示すことがそれぞれの言論を発する人々の特権でもあり、義務ではないかと思えます。

ここで、ドイツにおけるカント以降のドイツ・イデアリスムの時代を引き合いに出しましょう。この思想運動は、よく「ドイツ観念論」と訳されますけれども、私はこれは悪意を伴った誤訳だと思います。ドイツ語では「イデアリスムス」といい、英語では「アイディアリズム」ですが、これは「なさねばならないこと」、すなわち現実化すべき理念を謳い上げること、そういう理念を高く掲げることを意味します。このような思想運動がドイツの近代を準備する過程で、カントからヘーゲルまで展開された。そのみならず、エンゲルスの『フォイエルバッハ論』の末尾の言葉は、「ドイツの労働者階級の運動こそ、ドイツ古典哲学の相続者である」ですが、これは嘘偽りない言葉だった、と思います。

それから、19世紀末から20世紀初頭にかけての、まさしく社会学の大物でありますマックス・ウェーバーが活躍した、そういった時代も、学問思想が高揚した、よい意味での「イデアリスムス」の時代であったと思います。

日本の1990年代、バブルの崩壊以降の経済は、「空白の十年」と呼ばれているらしいのですが、学問思想でも、理念を欠落させた、すなわち、年少の学徒に示す方向性を喪失させた時代だったのではないかと、私たちは反省してみる必要があります。私たち大学生、とくに大学院の教育に携わる人々は、この理念喪失という事態を重く考えてみなければならない、と私は信じます。

私が観察するところによりますと、まさしくポストモダニズムと呼ばれる思潮がそういった理念喪失を体現した思想形態ではなかったか、と思います。ポストモダニズム的思潮のすべてがそのように言い切れるかどうかは、個々の具体的な現実の言説に沿って点検しなければならないとは思いますが、やはりポストモダニズム思潮には、無批判的な言説が多々存在していたことは認めざるをえない。それは、あまりにも近代的な価値を軽く見すぎた。

実は私は、『知の欺瞞』というタイトルで邦訳され、岩波書店から刊行されている、「サイエンス・ウォーズ」についての共著者の一人ジャン・ブリクモンというベルギー人科学者と、先週の初めに岩波書店で会いました。彼らが、ポストモダニズム科学論は「ファッションブル・ナンセンス」だという極めて強い言葉で批判しているような言説がまことしやかに流行したのがこの十年で、まさしく経済社会の「空白の十年」に対応します。経済的な「空白の十年」は小手先で修復することができるかもしれませんが、学問についての理念で失ったもの

が極めて大きなものでなかったかどうか考えてみる必要がある。このような憂慮を私はもっております。

そういったことを考えてみますと、あとで宮島先生からも言及があると思いますけれども、ここ十年は、批判性を欠落させた学問的言説が、とくに歴史学や社会科学で飛び交った。ソ連邦の解体という歴史的事件が、ちょうどバブル期が頂点に立った時点と重なって起こったわけですが、その折、まことしやかに「進歩的な」さまざまな将来を指し示す理念がすべてが崩壊してしまったかのように喧伝されたものでした。私は、「進歩派」がまったく責任をとる必要はないとは申しませんが、彼らにも責任あるけれども、現実には飛び交った言説は「進歩的」理念をすべて一緒に矮小化して葬り去るといった性格でした。

そのような時期に、論壇の寵児的存在として振る舞ったのは、かつて、いわゆる左翼とか「進歩派」を代表する形で最も急進的な旗を振っていた論客でした。例えば、あまり名前を出さなすぎるのもまずいと思いますから、あえて名前を出させていただきますけれども、和田春樹氏のような人々がその代表でした。彼はもの見事に流行に乗り、「社会主義」についての矮小な総括をやった。そのようなことが極めて顕著な現象として私の印象には残っています。

日本と対照的に、フランスではどうでしょうか。著名な社会学者で、極めて先鋭な言説を吐き続けたブルデュエのことをお考えください。彼はフランスのアカデミズムの在り方を1968年以降ずっと批判しながら、他方、もうひとつのアカデミズムの在り方を現実に示してくれた。日本の知識人は、そういった人々にはるかに劣る。和田氏は、フランスのそういった気骨ある知識人を誉め上げた私を「拝外主義」と非難したものです。換言しますと、外国崇拜主義ということです。悲しくなりますね。

それから、厳しいディシプリンをもって切磋琢磨し合いながら専門人を養成するという点では、ビジネスに関係するプロフェッショナル・スクールでも、あるいは私たちがかわる、ごく地味な純粋数学だとか、歴史学だとか、哲学のような学問分野における専門人を養成する点で、アメリカのグラデュエイト・スクールに、日本ははるかにまだ後れている。この学問論的反省を今、私たちはやらなければならないと思います。

今度はもう少し建設的な側面に目を転じて、どのような仕方、社会学なり、学問一般の方向を再建の方向に転じていったらよいかについて、議論してみたいと思

います。

別に、ここが福澤諭吉が創設した三田の慶應義塾だからというわけではないのですが、近代日本で最初に本格的学問理念を謳い上げた福澤の学問思想を問題にしてみたいと思います。福澤諭吉の『学問のすゝめ』と『文明論之概略』から学び、彼が設定した座標軸をどう修正したらよいか、という問題を論じてみたいのです。私も『学問論』という著書の中で、丸山眞男先生の意味を継承して、科学史の立場から福澤諭吉の明治初年の学問思想を再建し、改訂するという学問的作業を自分に課しております。ここでは福澤の、とくに啓蒙期の『学問のすゝめ』や『文明論之概略』を素材に取り上げたいと思います。

私は、そこで今から130年ほど前に発せられた福澤の言説が、すべて修正されるべきであるとは考えておりませんし、それからまた、そのまま現代に継承して、それで通じるというようにも思いません。その百何十年かの日本なり、世界の歴史の歩みを踏まえた上で、どの点が21世紀の初めにおいて修正されなければならないのか考察してみたいと考えます。座標軸の設定のし直し方を私論として試みてみたいのです。

福澤諭吉の『学問のすゝめ』や『文明論之概略』という、日本の近代思想の先駆的業績としてよく言及されますけれども、私はこれでは21世紀の初頭の現代においては、少し狭い見方ではないかと思えます。東アジアから私のところへ科学史を勉強しに来ている、とくに数学史を勉強しに来ている学生は、私の大学院の修士課程なり博士課程の学生の大体半数近くにもなります。私は十数人の大学院の学生を抱えておりますが、その半数ぐらいが東アジアからの留学生なのです。大陸の中国からやってきた学生の学力は、はっきり申し上げて、東京大学生え抜きの学生より当初は学力レベルそのものは落ちます。しかし、彼らの学問にかけた情熱といえますか、上昇気流に乗ろうとするベクトルの方向性において極めて高い方向係数をもっていいかと思えます。

実際に、福澤諭吉協会の読書会にも、この三田の地に昨年末私と一緒に来ました清華大学大学院出身の周程君という、今、博士課程を終えようとする学生ですが、彼などの学問的意識は大方の日本人以上です。彼は福澤と、それから、大体半世紀くらい遅れて『新青年』という雑誌を刊行することによって中国の本格的近代化運動を推進し始め、中国共産党を立ち上げた思想家でもありません陳独秀の比較研究をやっています。

昨日は、私のプリンストンの同窓生ですけれども、韓国のソウル国立大学の科学史家、金永植教授がいらっしゃって、私のところで講演していただきましたが、彼は近代日本の特異性、東アジア諸国における特異性を強調しておりました。そのように日本、あるいはアジア全体を見渡して、初めての本格的な近代的な思想家として登場したのが福澤諭吉でありました。そういった新たな歴史的展望のもとで、福澤の思想を捉え直すことが必要です。日本の近代的な知識人の最初の一人というよりも、東アジアのコンテクスト総体の中で、本格的に近代性を指し示した思想家として福澤を捉え直すことが必要ではないか、と私は思うのです（こういった点に関しての詳細な議論については、拙稿『文明論之概略』を現代の科学史的観点から読み直す』『福澤諭吉年鑑』29、2002年、を参照されたい）。

もちろん私は、最近出されている福澤批判を知らないわけではありません。福澤の朝鮮なり中国なりの認識には近隣諸国を蔑視した見方がある、そのことを、例えば、安川寿之輔氏という名古屋大学の教育学部で教育史を長い間講じておられた方が、最近、『福澤諭吉のアジア認識』（高文研）というタイトルの本を刊行し、極めて手厳しい福澤批判を展開しております。安川氏によれば、『学問のすゝめ』や『文明論之概略』のような啓蒙期の最も輝かしい著作と規定されてきた著作にも既にそういうアジア蔑視の思想があったという考えを克明に詳細に示しております。

しかし、安川氏が批判している丸山眞男先生の福澤論は、それほど時代遅れでしょうか。丸山眞男先生は周知のように、戦争中から、徳川初期の萩生徂徠とともに、福澤諭吉の思想に「惚れ」ていましたが、それはどうしてでしょうか。安川氏の福澤批判の弱点は、福澤の極めて優れた近代性をも一緒に流し去っている点です。というのは、福澤は「惑溺」といった旧来の思考習慣に安易に従ってしまったり、無批判的に追従したりしてしまう精神に対して、気骨ある批判的精神の保持を訴えたのですが、それこそ、丸山先生が福澤精神の中核部分と捉えたことがらでした。

私は安川氏の指摘した福澤の否定的側面は、かなり当たっていると思います。というより、福澤だけではなく、ほとんどすべての日本人が福澤と同様以下の差別意識を近隣諸国人民に抱いてしまったのでした。これは歴史的事実で、私たちが乗り越えるべきことがらです。安川氏の批判は、ただし、極めて非歴史的で、現在の価値観をもって福澤を断罪しているような安易さがある。安川氏

に私は決して妥協できない。私のはっきりと丸山先生の福澤論で継承したいと思う点は、福澤は東アジアにあって近代的精神というのがいかなるものであるべきかの規準を明確に据えた最初の人だった、そのことを忘れてはならないという点です。それは端的に言って批判的精神です。私は、数年前この三田の小泉信三講座の一環として「福澤論吉・バックル・懐疑主義」という講演を試みましたが、そこで強調したのは、福澤が体現した、懐疑主義＝批判的精神を復権せねばならない、ということでした。最近のポストモダニズムの支配的言説では、近代性ということがすべてマイナスの価値のように喧伝されたりしているのですけれども、私たちが一番が継承しなくてはだめな批判的精神を打ち立てようとして刊行されたのが福澤の最もラディカルな著書であります『学問のすゝめ』であり、また「西洋の文明を目的とする」と言いながらも、日本的な主体性をも示し得た名著の『文明論之概略』でした。そのことが晩年の丸山眞男先生をして、岩波書店の編集部の方々を集めての講話『「文明論之概略」を読む』に集約されたのだ、と思います。

ところで、福澤が『福翁自伝』で書いていることなのですけれども、東洋の学問の精神になくて、西洋の精神にあるものとして彼が第一に挙げたのが、独立心。これは周知です。それからもうひとつには、17世紀に生まれた「数理学」。この中身が一体現実には何であるのかということについてはおおいに議論があると思うのですが、丸山先生も示唆されているように、私も、それは近代自然科学の中心的著作と考えてよい、ニュートンの『自然哲学の数学的諸原理』、別名『グリーンキピア』が体現している数学的諸科学であったことは間違いないと考えます。

振り返ってみますと、私たちははたして、この独立心と数理学の精神を十分継承し得たでしょうか。日本の独自の立場から、その精神を継承した上での新しい創造的な知識を発信できる地位に立っているかということ、私は必ずしもそうではないと思います。私は、基本的原則は保持しながら、安川氏が指摘したような批判を受け入れ、自分たちの誤りを率直に訂正することも福澤的な開明的精神ではないかと思えます。そういった批判的精神を継承することこそが日本の今後の学問論に課せられた課題ではないか考える次第です。

ただし、福澤の私たちに遺した学問思想には幾つか修正すべき点もないわけではありません。このことがこれから私が展開したい論点です。科学的観点から見て、福澤が「物理学の要用」という、元々は慶應義塾での講

演（1882年発表）で謳った科学観は、19世紀の後半では仕方のないことでしたけれども、物理学中心主義でありました。この思想を明確に再考すべき時代相に私たちはいるのではないのでしょうか。物理学を軽視しろ、と言っているではありません。その学問の精神を継承したうえで、且つ21世紀の現在は、環境や資源に黄色から赤色の信号が灯っている時代なのですから、この要因をも勘案しなければならない、と私は言っているのです。私自身は、この転換の必要性を「科学技術の環境資源論的転回」と呼んでいます。

福澤は晩年、足尾銅山の鉱毒事件が起こった際にも、抵抗する農民たちにひどく冷淡な態度をとりました。当然、弾圧してしかるべきだとすら断じています。勝海舟のような抵抗農民支持派と対照させて見ると、印象的です。日本の工業は未発達だったので、福澤の立場は弁護すべきであるとする議論もあることを、私は承知しておりますけれども、福澤自身、『学問のすゝめ』では、農民の抵抗運動の先頭に立った佐倉惣五郎を支持する立場をとっていたのです。福澤の環境資源に対する軽視は、現代から見て立ち後れた側面であったと思います。ともかく、福澤の物理学中心主義はエコロジックの視点を入れて、転換が求められている。この転回は、好き嫌いで済まない、必然的な要請であると私は信じます。

もうひとつ、福澤の中国医学に対する拒否は性急な短見であった、と私は考えています。中国伝統医学を迷信や神秘主義的な医学観に立つ医療法だと誤解している人がありますが、これは端的に言って先入観に基づく判断です。中国医学の総合的な予防医学としての側面だとか、西欧近代医学には見られない発想を元とした診断法、医薬の巨大な宝庫などには、現在、かなり高い価値が付与されているのが現実です。私は日本漢方には実はかなり批判的なのですけれども、中国伝統医学には、継承すべきことがたくさん存在すると見えています。中国のみならず朝鮮などでの中国伝統医学は伝承されており、東アジア諸国でいわれなく排撃してきたのは近代日本だけです。私は西欧近代医学をやめにして、伝統医学に帰れと主張しているわけではありません。西欧近代医学の高い基準を継承しながら、中国伝統医学からも学ぶべき点が多々ある、と言っているのです。中国では、両方の長所を取り入れた「中西医結合医療」が定着していますが、その発想から学ぶべき点は多々あります。福澤は中国医学を儒教ともども排撃しようとしたことが、より高い批判的判断規準で、彼の医学観は再考すべきであると思います。

新しい科学哲学的規準から見て、私は、ニュートンの『プリンキピア』に代表されるような理論物理学の高い批判的学問のレベルを継承したうえで、その伝統と並行させて、エコロジ的な価値だとか、伝統医学の意義を復権すべき時代が到来していると思います。

福澤諭吉は大目標として「西洋文明を目的とすること」を掲げた。私は、それは福澤の非凡な課題設定だったと高く評価します。しかし、彼は同時に、東アジアの主体性の保持をも訴えていたと思います。微妙な軌道修正が求められる時代が今到来しているのです。フェアな精神で今一度、「西洋文明」の実像とはいかなるものであったのかを見直す時期が来ているのです。同時に、アジア近隣諸国の伝統文化の蔑視をもフェアな精神で見直すべきだと信じます。

たとえば、日本史の場合ですと、江戸時代の再評価が現に進行しております。最近、江戸学という知的作業が進み、単なる流行ではなしに、私たちが真剣に考慮すべき学問が創造されつつあります。私のような数学史家から見ても、江戸時代にはアマチュア数学者が現れて、中国伝統数学を抜本的に変革する新しい高度な数学文化が創り出された。中には女性たちも、そういった知能活動なり伝承なりに参加したということも明らかにされております。

それから、ご承知のとおり、江戸社会は、理想化はできませんけれども、かなりのエコロジカルな側面にも配慮し、ある種のリサイクル社会であったことも明らかにされております。無視できない伝統的価値として評価されてしかるべき点だったのではないかと思います。

私たち日本人の学問は、幕末までは、主として中国文化から派生した衛星文化として学問でした。独自の創意も取り込みながらも、日本の伝統思想・文化は中国に由来するものであったことは否定できません。その1000年以上の文化的遺産の上に、東アジアでは極めて稀な歴史の実験として、西欧近代文化を、福澤を先頭にして、全面的に受け入れようとした。この文化的接ぎ木を、私は決してまずいものだとは思っておりません。私はむしろ、そういう文化史的創造の面白さを再認識すべきだと言っているのです。1000年以上にわたって輸入された中国文化は私たちの貴重な遺産です。私の話している日本語も、それから書き言葉である漢字も彼らの文化に浸透されているのでありまして、その上に、私たちは西欧の最先端の科学技術だとか、政治的制度だとかを、留学生を派遣し、それから外国人教師を招いて、導入しようと図った。そのような文明の接ぎ木をやり得たことはな

かなか面白い歴史的経験でした。

確かに日本の文化は、一般に独創的な、たとえばヨーロッパのギリシャの文化だとか西欧近代の文化のような積極性をもっておらず、受動的ながらも、面白い文化を創り上げた。それゆえ、諸文化をかなりフェアな精神をもって比較してみる観点もちうる。先ほど、前から畏敬しておりました鈴木孝夫先生が言語哲学についての面白い話をされましたけれども、その観点は、文化論一般に適用できるのではないかと。私はそれほどヨーロッパ諸語に堪能なわけではなしに、とくに東北人ですから、書くのはまあまあですが、話すのは一般にあまりうまくない。私にはアイルランド出身の友人で、ヨーロッパ語は方言的なものも含めて約40ヶ国語ぐらい堪能に読み書きをできると言っていた人がおりました。そのような言語能力に関する自慢話は、言語学専門の人によくある吹聴だと考えておりました。ところが、彼がスペイン語を話すのを聞いていましたら、まさしくものすごく流暢に話しているのに驚かされました。それぐらいインド・ヨーロッパ諸語に堪能な人です。しかし、私の目の前で、彼が言うには、「自分は中国語にチャレンジしてある程度はそのシンタックスは身に着けた。しかし、書く段になると、お手上げ状態であった。さらに、日本語になると、完全に駄目だった」。それで、ヨーロッパ諸語の達人である彼は、私にはものすごいコンプレックスを感ずるというのです。この発言は私に対するある意味でのゴマ擦りも含まれていたのかもしれませんが、真実が含まれていたことも確かです。

私たちは決して自惚れてしまってはいけませんけれども、私たちが普通ネガティブな側面と考える点をポジティブな方向に転じて解釈し直して、この国際社会の中で新たな知の発信の主体になり得ることは十分可能ではないかと思えます。

このような稀有の文化史的背景をもつ面白さを創造的に生かさない手はない。狭い意味でのソシオロジーというよりも、ごく広く社会科学、諸科学を横断して知的作業を行なう際に、活用すべき観点ではないかとすら思います。

最後に、私がとくに「社会学」に要請したいことについて話させていただきます。

社会学に対して、私が科学史の立場から特に要請しておきたいことをかいつまんで述べて私の拙い話を終わらせていただきたいと思います。

私が強調したいのは、科学技術の社会的次元の整備の必要性についてです。先ほど言った「科学技術の環境資

源論的転回」を社会的に支える学問的運動をぜひ開始していただきたい、ということです。

また、付随的に、男性と女性の共生社会のために必要かを考える重要性を訴え、さらに、アジアの共同体に新しい進路を指し示す中から、世界（国際社会）の中の日本の役割を考え直し、慶應義塾独自の、東京大学とは異なる独自の大学院の役割を考えていただきたい、ということも、ここで提言いたしたい論点です。

さて、日本の受験教育の弊害のひとつとして「文科系」「理科系」の分岐という問題があります。受験の時から既に自分は数学が苦手な「文科系」だから、数学や自然科学にかかわりのあることがらは最初から敬遠する、こんな知的態度が蔓延してはいないでしょうか。このような思考習慣はやはりやめるべきでありまして、広い意味での社会学、もしくは社会科学がこれからやらなければならないことの一つは、この高度なリスクを抱えた科学技術社会において、リスクを極小にする社会的次元がどうあるべきかということの考察です。この問題を、是非、社会科学的観点から解明していただきたい。先駆的業績は存在しています。ドイツのウルリッヒ・ベックの『リスク社会』です。確か、チェルノブイリの原子力発電所事故直後に出版されているはずで、1986年刊です。

科学技術の21世紀の最大の課題は、先ほども言いました「環境資源論的転回」であると私は考えております。日本は、例えば、1999年9月30日の東海村におけるJCOの臨界事故があったにもかかわらず、原子力発電という高いリスクを背負った技術の社会的・政治的制度化を続けている国でありまして、このことは、ヨーロッパ、とくに北欧諸国と対照的です。環境資源政策に関して最先進国はデンマークだと思いますが、そのようなトップランナーと比較して、わが国のエネルギー政策の特異性を社会的観点からは是非考察していただきたい。その意味で、「理科系」と「文科系」の境界を是非取っ払っていただきたい。

それから、私たち東京大学大学院の総合文化研究科には、女子学生たちの人気がとても高い専門学問分野がありまして、それは国際関係論です。この慶應の社会学研究科には、大変高名な優れた研究者がおられて、それで憧れて来るという学生もいるかもしれませんが、私の見る限り、東大の国際関係論コースには必ずしも目立ったスター教授はいないように思います。にもかかわらず、と言うと語弊があるかもしれませんが、それでも人気が高い。どこか魅力があるらしい。社会諸科学を総合的に融合し、国際社会で活用してゆこうという方向性が魅力

なのでしょう。そのような独自の方向性をもった大学院のコースを探ってみるとよいかも。新しい学問の方向を考えるためにさまざまな、これまでに存在していなかった共生の手段を考えてみる。とくに男性と女性の共生です。女性のもつ独自の価値観を生かした学問だとかを模索してみる。別にジェンダー的障壁など考えなくともよいと考える向きもいるかもしませんが、私は、そうではなしに、お互いがそれぞれの個性を尊重しながら共生していく男女のあり方において、女性のジェンダーの特徴を生かした社会学があってもよいのではないかと考えます。もっとも、このようなことは、私などが言わなくても、その価値は既にわきまえられているかもしれません。

それから、最近、歴史教科書のことでおおいに問題になっております東アジア地域に新しい展望を見出すという問題があります。先ほど私は福澤についてネガティブな評価が出されていると紹介しましたが、これに関連して、逆に、アジアの現在の在り方を、ネガティブなものからポジティブな在り方に転ずる方向で考え直す見方もあるのではないかと考えます。アジアの同胞たちの現在の知的向上心は刮目すべきであると言いましたが、そのことは反対に、私たちが彼らを援助できる点があるということでもある。

私が最近読んだ本の中で印象に残ったものの中に、たとえば、中国の環境政策に慶應義塾の研究者たちが熱心にかかわって、財政的にも知的にも協力しているということについて書かれた本がございました。そういった学問的活動には、かつて福澤が負った負債というものをポジティブに転じて、アジアの人々に日本が積極的に貢献している側面がある。過去のアジアに対する負債が巨大であるからといって、怖じ気づく必要はない。そのような問題は多々あるはずである。

アジアの中にありながら、福澤以降、西欧の近代社会を創造しようとして努力してきた経験を学問にして、日本に対してだけではなしに発信すべきだと私は考えます。現在の日本人は、日本語だけではなく、英語でごく普通に発信できるので、ごく自然に国際社会にぜひ打って出るような、そのような大学院のコースにいただきたい。

東京大学は今後どうなるかは知りませんが、日本のアカデミズムの中心として、中軸的研究者の養成機関として存続しなければならない、と私は考えております。

慶應義塾の場合には、そのような東大の負った役割と

はまた違った意味で、実社会との直接的連携を念頭に置き、かつ国際社会との交流のダイナミズムを前面に打ち出した独自性をもつことが重要かもしれない。私学はハンディキャップとともに、自由裁量が許される身軽さも抱えており、国際的に自己主張できる制度的基盤をもってあります。今年は21世紀の最初に年に当たり、福澤が亡くなってちょうど今年で100年ですけれども、彼が明治の初年に打ち出したような、進取の気性に富んだ学問論を是非、この社会学研究科から発していただきたいと希望します。

これで貧しい前座の役割は果たしたのではないかと思います。議論の席で改めて議論に参加したいと思いません。ご清聴、ありがとうございます。(拍手)

[2002年5月の講演後の付記：慶應義塾大学大学院社会学研究科に私がとくに学問論的課題として要請しておくべきは、科学技術社会学の制度化ということであろう。科学史や科学社会学と比較して、科学技術社会学は、それほど科学や技術に関するテクニカルな専門的知識が要求されることはない。もっとも、あるにこしたことはないが。そのために参照していただきたい書物は、Ulrich Beck, *Riskgesellschaft*, Suhrkamp Verlag, 1986 (東廉・伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局, 1998)であろう。特色があり、アクチャリティのある学問制度化のために、ぜひ検討していただきたい。]

司会(杉浦) どうもありがとうございました。

報告 2

司会(杉浦) 引続き、寺崎先生からご報告をお願いいたします。

日本の大学院とその教育

——現状・問題点・将来——

寺崎 昌 男

(桜美林大学大学院教授)

寺崎でございます。学問論そのものは前後の2人の先生にほとんど全面的にお任せいたしまして、私は大学院の制度、あるいは大学教育史をこれまで専攻してきましたことを生かして、もっぱら日本の大学院のこれまでの歴史を大雑把に振り返ってみたいと思います。その中でこちらの社会学研究科の組織の位置付けというのはどう

なるだろうか。それを、きょう、ちょうどいい記念にお招きいただきましたのを機に、ご一緒に考えてみたいと思っております。

今、日本の大学院は大規模な量的拡大の直前にあると思います。ご承知と思えますけれども、一昨年、大学審議会というところが、(最近は省庁再編で中央教育審議会になってしまいましたけれども)最後から2番目に出した大きな報告書があるんです。「21世紀の大学像と今後の改革方策について」。これを読んでみますと、この中に大学院の将来像というのが非常に端的に書かれております。

読んでみますと、「大学院への進学動向に基づく推計においては、平成22年、2010年の修士課程の入学者の規模は約8万7,000人、博士課程は、約2万3,000人となる。そのうち社会人学生の占める割合は、それぞれの17~18%を占めるとされている」と、あります。こういう答申の中に「されている」とか「推計」とか書いてあることは、大体そのままに実現するつもりであると、我々は読まないといけません。

そう読みますと、大学院は、ここに書かれております入学規模の推計というのを仮に修士が2か年博士が3か年というふうに換算してみますと、2010年に学生数の総計は24万9,000人になる予定になっているのです。今から50年前、旧制大学がまだありました頃、旧制大学と旧制高校の専門学校の一部すなわち、いわゆる高等教育機関在学者は、およそ50万人でした。つまり旧制時代の日本の高等教育の約半分の規模にこれから大学院は拡大するというのが、目に見えているわけです。ですから、21世紀は大学院のかつてない大規模化の時代であるというふうに私は思います。それをどう受けとめるかということが、我々にとって非常に大きい課題になってきているのではないかと。これが第1点でございます。

第2番目は、開放に伴って、特に社会人及び留学生、これに対して開放していかなければ、とても、ここで推計されているような数字にはならないだろうと思われまます。「2010年には社会人の割合が17~18%になるだろう」と書かれておりますが、今年の統計では、もう確か11.8%ぐらいが社会人です。ですから、この推計はほぼ妥当するだろうと思われまます。そういうふう広がる。特に留学生、社会人、それから、最後は専門職業の現職者に広がっていく。ということは従来の大学院像そのものが、研究者養成というような小さい枠に収まらないものになりかかっている。恐らくそういうふう開放され